

【学校教育ビジョン】 自ら学び、ともに未来を創る金明つ子の育成  
 【めざす児童像】 失敗をおそれず、挑戦する子  
 (自律した学び手を育てる。児童理解を基盤にした授業づくりを進める。個別最適な学習と協働的な学びの一体的な充実を目指す)  
 ・「やってみよう」に挑む子 (他者の良さを取り入れ、主体的に行動する場をつくる。心理的安全性がある居心地のよい学校・学級をつくる。生徒指導の4つの視点を生かした教育活動を推進する)  
 ・「一緒に」高め合う子 (自分が納得するまで取り組む力を育む。自分の命を自分で守る意識と実践力を高める。健康に対する意欲・知識・実践力を高める)  
 ・「できた」までやり抜く子

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	児童に学びを委ねる授業づくり	・自律した学びてを目標として個別最適な学びと協働的な学びの充実を図る。	研究主任	6年間を見通した「自律した学びての仲」の共有により、児童は集中して学ぶ姿勢や自己選択の力を伸ばし、多様な学習や学び合う姿が見られた。一方で、選択が固定化した活動の成立が目的化する傾向も見られ、自らの学びのプロセスを客観視し「この学び方で目標に迫れているか」を問い直すメタ認知の育成や、必要に応じて他者へ支援を求める力の向上が必要である。	【成果指標】 ・学びのめあてをたて、次につながる振り返りができる。	「学習のゴールに向けて、自分が選んだ学び方(進め方や環境)が効果的だったか、途中で確かめたり修正したりすることができた」と答える児童が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査			
	基礎・基本の定着	・計算チャレンジで、計算力の定着を図る。	教務主任	児童は課題に真摯に取り組み、基礎・基本が概ね定着してきている。しかし、定着の遅い児童が一定数いる。今後は苦手な問題を中心に計画的に繰り返しの練習を実施し、適切な個別の支援の充実を図る。	【成果指標】 ・児童が計算の基礎・基本を身に付けている。	計算チャレンジの正答率80%を超える児童が A90%以上 B85%以上 C75%以上 D75%未満	計算チャレンジ(7月・12月)			
②生徒指導	居心地のよい学校・学級づくり	・児童の、児童による、児童のための学校づくりを推進する。	児童会	児童は授業に限らず、行事や特別活動にも主体的かつ意欲的に取り組んでいる。今後は、昨年度の実践を土台に、より創造的で自治的な学校づくりを児童自らが力強く進められるよう、教師は一步引いて見守りつつ、的確に支援していく。また、発達支持的生徒指導の視点で様々な働きかけをしていく。	【満足度指標】 ・児童が「学校は楽しい」と感じている。	「学校は楽しい」と思う児童が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査			
	いじめ・不登校問題への組織的な対応	・いじめ、不登校の問題に対して、組織的に対応し、未然防止・早期発見・早期対応及びその記録に努める。	生徒指導主事	児童は概ね落ち着いて学校生活を過ごしているが、中には人間関係や学業に対して不安な思いをもっている児童が一定数いる。児童の思いを知り、受け止め、真摯に向き合っていくには、組織的な対応が必要となってくる。情報の共有や記録の体制を整え、全教職員で対応を図る。	【満足度指標】 諸問題の未然防止・早期発見・早期対応及びその記録の取り組みが、組織的・協働的かつ日常的に行われている。	アンケートや面談の実施が、諸問題の対応に役立っていると感じた教職員が、○人中 A ○人 B ○人 C ○人 D ○人以下	1・2学期末に、教職員を対象にアンケート調査			
③キャリア教育・進路指導	自己肯定感・自己有用感の向上	児童に感謝の気持ちを伝えるため、日々の活動や特別活動を通じて、個々の努力や成果を認め、励ます声かけを行う。	キャリア教育	日々の学校生活や行事において、自分の目標を意識しながら取り組み、達成度を振り返る姿が見られるようになってきた。今後は、特別活動や委員会、清掃などを通して「人の役に立つ喜び」を実感できる機会を大切に、自己有用感を高め、自信や次の目標につなげていけるよう支援していく。	【成果指標】 児童が誰かの役に立つ喜びを実感している。	「誰かの役に立つとうれしいですか」と思う児童が A 85%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査			
④保健管理	健康に対する意識・実践力の向上	計画的な指導により、健康的な生活習慣を身につけ、健康に過ごす意識・実践力の向上を図る。	保健主事 養護教諭	メディアのルールが守られていると捉えている児童が多いものの、保護者の意識とは乖離が見られる。メディア利用の正しい知識・技能を身につけ、児童自らが実践するために、引き続き指導・啓発をしていく必要がある。	【成果指標】 児童が自ら生活習慣を改善しようとしている。	メディアのルールの改善について、自分なりに考えて取り組むことができた児童が A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査			
	体力・運動能力の向上	1校1プランの取組により体力・運動能力の向上を図る。	体育	昨年度の体力テストでは、長座体前屈の記録が全学年で県平均を下回った。体育科の授業改善を中心に、児童の柔軟性の向上を図りたい。	【成果指標】 長座体前屈の記録が向上するよう努めている。	4月の記録と比べて向上した児童が A 70%以上 B 60%以上 C 50%以上 D 50%未満	4月、6月、11月に4年生以上の児童を対象に計測			
⑤安全指導	計画的な学校安全に関わる取組の実施と、児童・教職員の危機管理対応力の向上	どのような行動をとることが安全なのか、自ら考え行動できる力を高めるために、訓練の前に避難の際に必要な知識を伝え訓練後に振り返る時間を設定する。	教頭	計画的に避難訓練を行い、児童が自ら考え行動しようとする意識の向上を図るため、事前学習を取り入れてきた。自分の命は自分で守るという意識やそのために何が大切かという知識は身につけてきている。今後も、「自分の命は自分で守る」という意識を高め、訓練の意義を理解するために、安全学習は継続して行う必要がある。	【成果指標】 児童が、生活、交通、災害に関する様々な危険の要因や事故の防止について理解し、進んで安全な行動ができるよう努めている。	自分の命は自分で守ることができたと回答した児童が A 90%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	1・2学期末に、児童を対象にアンケート調査			
⑥特別支援教育	個に応じた支援の充実	配慮が必要な児童についての情報・効果的な支援の在り方を共有し、個に応じた支援を行う。	特別支援教育 コーディネーター	定期的には校内支援委員会を開き、支援の方法を検討する。専門相談員などとなつ際には、継続して見ていただき支援の方法を共有する。また授業中における児童の学びの様子を的確に見取り、個に応じた支援をしていくとともに、具体的な支援の例などの研修を行う。	【成果指標】 支援委員会でも共有した個に応じた支援内容や、授業で実践した支援に対して児童の姿が見られたと感じている。	支援内容や方法を実践しようとする。そのうえで児童の姿が見られたと感じた教職員が 10人中 A 8人以上 B 7人 C 5~6人 D 4人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査			
⑦組織運営・業務改善	業務の効率化	効率的に業務にあたるために、部会や主任会の計画的な設定や放課後時間を確保する。	教頭	日課の工夫等により、放課後時間を確保することで、学校研究や学級事務に関わる業務を行うことができた。今年度も教務と連携し日課の工夫を行い、見通しをもった業務の遂行に努める。	【成果指標】 月予定や年間予定を見直し、日課の工夫による放課後時間の確保等を生かして効率的に業務を遂行することができた。	放課後時間の確保等を生かして、効率的に業務を遂行することができたと回答した教職員が10人中 A 8人以上 B 7人 C 5~6人 D 4人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査			
⑧研修	教員の育成	日常的OJTを意識して、全教員による学び合いを行う。	教頭	若手教員が2名おり、うち一人は初任教員である。若手研修のリーダーを中心に日常的なOJTを進め、若手教員の育成を図る必要がある。また、全教職員が相互に学び合うことで、それぞれの指導力の向上を図ることが必要である。	【成果指標】 普段から教員相互による学び合いや、全教職員への指導・助言を行っている。	日常的なOJTを意識して、相互に学び合うことができた回答した教職員が10人中 A 9人以上 B 8人 C 6~7人 D 5人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査			
⑨保護者、地域との連携	開かれた学校づくり	年度当初に立案した計画をもとにCSGとの連携を図り、まちの先生の招聘を効果的に行う。	教頭	昨年度に立案した計画が年間を通して効果的に実施できなかった。年度初め作成した各学年の計画をもとに、CS担当者が担任やCSGに声掛けをする必要がある。	【努力指標】 年間計画をもとにしてCSGと連携をし、まちの先生を効果的に活用することに努めている。	年間計画をもとにCSGと連携をして、まちの先生を効果的に活用する先生が9人中 A 8人以上 B 6~7人 C 4~5人 D 3人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査			
⑩教育環境整備	児童の意欲を高める環境デザイン	児童が学びの主体として成長できる環境づくりを進め、自己選択を尊重し、意欲的な学びを支える環境作りを行う。	教務主任 研究主任	昨年度は、環境設定に努めたところ肯定的に回答した教師が100%であったが、すべての児童に効果的に機能していたとは言えない。児童一人ひとりがより主体的に学べるよう、教科のねらいや実態に即した環境デザインを工夫する。安心して思考を表現できる人間関係や空間、見通しをもたせた教材提示、多様な学び方を選べる柔軟な学習環境を通して、自ら学びを深める力を引き出す場を創出する。	【努力指標】 自律した学びを進めることができる環境づくりに努めている。	環境づくりに努めた教職員(ヒントカードや教師のフィードバック等)が9人中 A 8人以上 B 6~7人 C 4~5人 D 3人以下	1・2学期末に教職員を対象にアンケート調査			

学校関係者評価	
---------	--